



によらいさんはどこにをる
によらいさんはここにをる
さいちがここにみちみちて
なむあみだぶをもうしてをるよ

浅原才市 (一八五〇〜一九三二)



妙好人（篤信の真宗門徒）として知られる島根県温泉津町（現大田市）の浅原才市。げた職人でかんなくずや木っ端に1万にも及ぶ歌（口あい）を書き付けた。自らの中に煩惱が満ち満ちているのが真の姿だとして、自身の肖像画にツノを描き足させた。

「私を離れて、遠いところに如来さまがあるのではない。如来は私の内にも外にも、みちみちていて下さる。そして私とひとつになり、鈍な私に『きちんと合わせて』、どこにいても、何をしても、私のするままに任せて、それをそっくりひきうけてくださる。私が如来さまとひとつになるので

はなく、如来が私とひとつになってくださった」（『ご恩うれしや』浅原才市顕彰会）

最先端科学では、ゼロポイントフィールドと言って、過去未来全宇宙の情報がひとつに畳み込まれているという理論がある。将来、予知夢や虫の知らせ、生まれ変わりさえも解明されるのかもしれない。

時空に縛られぬ阿弥陀という仏性もまた、自己中心性から逃れられぬ私の意識の中に現れ、一体となり、虚仮不実な人生を真実の側から支えんと働く。その絶対的安心を「ええなあ 世界虚空がみなほとけわしもその中 なむあみだぶつ」（才市）と味わう。

令和6年4月28日 坊守・芳蓮院釈慈穂 往生に際してのご報告

妻、林千種は二年三ヶ月に及ぶ病氣治療の末 49歳の生涯を全うし、自坊にて5月2日に葬儀を、6月23日に満中陰法要を営みました。多くの皆様からお悔やみ・ご香料を頂戴し、心から感謝申し上げます。ここに至る経緯と筆者の思いを記しておきます。(住職 林 暁)

■ 2021年1月前半、訳あって家を出た妻は、一人アパート暮らしを始めた。体(皮膚)を立て直しながら実家施設勤務も続けるも、秋ごろからお腹に変調あり。

翌2022年1月4日、日赤受診して右卵巣に赤ちゃんの頭くらいの腫瘍、がんだと告げられる。第1期後半、標準治療は左右卵巣と子宮の全摘および抗がん剤との説明。

本人も一旦は考えるが、アトピーアレルギー体質、肌がひどい状態で血管も弱く点滴痛に加え「もうこれ以上体を傷つけない!」と内から声がしたと言い、抗がん剤も効きにくいタイプとのこと、結果的に病院の治療は断念した。

同月24日夜、在宅療養中の父・先代住職が往生し、妻は1年ぶりに家に顔を見せ、母や近所の方と泣いて対面した。

同じ頃、自然療法で乳がんを治した友人の紹介でNPO法人「がんの患者学研究所」(代表、元NHKディレクター川竹氏は自分で腎臓がんを克服)の会員となり、各種温熱療法や玄米菜食などを主に体質改善の道を進むことになる。

電熱式温灸セットや、病態に応じた様々な手当て法と食事療法のテキスト、また自然退縮させた方々の手記やセミナーなども充実していて熱心に勉強し、カウンセリングも受けつつ自助療法を実践していった。

特に、末期や再発した方でもメンタル面に踏み込み、自分に合った手当て法を工夫し、仕事と生活様式や家庭環境も根本的に変えて自助退縮させたことに大きな影響を受けた。玄米菜食や呼吸法、体操、ウオー

キング、冷え取り健康法なども取り入れ、その結果皮膚からさまざま毒出しを経て、年末にはアトピーは完治する。

平熱も上がって汗もよくかけるよう

になったが、お腹の腫瘍はなかなか小さくならず。特に秋以降は重く固くなって、半身浴を2、3時間は序の口、最長15時間入ってしのぐ日もあった(浮力とお湯でラクになる)。年末に、別の友人の紹介で博多の末期癌専門医・白川太郎先生が来訪。ヨウ素水や免疫療法などの治療法を説明され、パンパンになった中身を検査することに。

■ 2023年1月3日、腹部激痛に見舞われ救急搬送で日赤に入院。腹部の腫瘍部分(卵巣・卵管・子宮と水分の約4キロ)を緊急摘出し(全部取ると人工肛門のリスクあると言われ)、結果的に腸に近い腫瘍部分4-5センチを取り残して退院する。

春~初夏ごろ強い倦怠感が続き、ヨウ素水の副作用である甲状腺機能障害との診断。しばらくして服用をやめる。自由診療で費用もかかるし、結局そういったものに頼るのは自分の力で治したことになるのではないとの主張だった(ただしCTC検査は継続)。

夏頃から、手間のかかる全身生姜電法な



ど温熱療法を再度限界までやり抜くと決め、陶板浴にも週一回通って毒出しに励む。定期受診では腫瘍の大きさに変化はなく、時々肛門の奥がズキズキするとのこと。

しかし昨夏の猛暑は異常なうえ、汗出し毒出しにも体力は必要で、もしかしたらこの時期のやりすぎが免疫力を落としたのかもしれないと、後日彼女は口にした。

10月初め頃から再び顔つきや体調の変調が現れ始め、11月のMRI検査では、6-7センチほどの腫瘍が三箇所ほどと予想外の結果。彼女はNPOから、自助療法はやりすぎくらいやってる、もっとメンタル面を重点にとの助言で切り替えを図る。

同じ頃、枇杷葉こんにやく温湿布を始める。患部に当てた枇杷葉は黒くなり各所のしこりも柔らかくなり、便秘も改善したり。ただ食の量は減ってきて筋力が落ちてくる。

12月半ばに、ある方から「二人が一緒に暮らした方が早く治る、林家のご先祖の方があなたをかわいい嫁だと言って守ってくれているよ」との進言を素直に受け取り、彼女の中で葛藤していた問題が大きく変わった。しかし腫瘍熱（午後から出始め夜中に38-9度

近く上がって大汗をかき夜中に二度ほど着替え、明け方に微熱に落ち着く）が出始め、体力気力を消耗。

■ 2024年1月下旬、メールも制限し始め精神的にも

不安定に。こだわり続けた玄米菜食ももういい、食べたいものを食べようと本人も転換し、10-15分立ってるのがやっとなのに有精卵でだし巻き卵を作って元気回復したり、近くの回転寿司でイクラを3年ぶりに食べて涙ぐむほどだった。

発熱は落ち着くが血尿や下痢を発症。これも長引き、へそ灸などで一定の反応はあったが、ほぼ一日一食程度でかなり痩せてしまい、体力筋力が減退していった。

2月半ば、本人から後始末の算段を告げられる。以前の手当ても滞りがちで、お腹にボウリング球抱えてるような辛さだと。

3月初旬、友人から大阪の治療家を紹介され、緊急の枠が取れる。これがラストチャンス、どういう結果になっても受け入れるとの覚悟で向かう。治療者は普通のおじさん。その独特な手技能力でがんのしこりはほぼ消失しお腹はゆるゆる、「もう好きなもの食べれる」などと話され、彼女は涙し二人でとても喜んだ。（奥にまだ少し固いものがあるようだとは言ってたが）。

ただ、下痢や胃のむかつきは治らず、痙攣のような症状やひどい倦怠感など反動に見舞われる。トイレにもやっとで身の回りの世話が必要な生活。結局3月下旬、脱水状態と本人が認識し近くの循環器内科に駆け込み、その週4回点滴を受けた。

そこの腹部エコーでは数センチくらい？の少しいびつな腫瘍が確認され、貧血と栄養不良、脱水、120くらいの頻脈状態。

4月頭から週三回の訪問看護の点滴に切り替えるも、6日夕方、一時心臓が爆発しそうな状態に陥る。血液検査では輸血が必要なレベルで、翌々日に日赤に緊急入院することを承諾。彼女はタオルで顔を覆って泣いたが、輸血して体力つけば退院できるだろうとの目論見だった。



'23年秋
アパート



■ 4月9日(月)入院初日、CT検査で10センチほどの腫瘍と、腸管穿孔を起こしている可能性大。加えて両足に大きな血栓があり貧血のため投薬も無理との診断。

医師から、終末期として万一の処置について問われると、本人は「緩和ケアも延命も不要、救命措置もいらない、その時はここで死ぬ、もう体には十分感謝してるから後悔はない」とすぐさま意思表示した。

入院最初の週は輸血点滴で数値は徐々に上向きになり、食事も七割程度は食べられたが、その後はあまり改善せず。傾眠状態が出始め、喋る息も弱く滑舌が悪くなる。

結局翌週初め、病院ではもう治療の術がなく、不本意ながら寝たきりでの退院だとして、介護ベッドを自宅に入れる準備や訪問医療の調整にその週を費やした。

■ 4月22日(月)、病室へ迎えに行くと「今日帰れるよ」と言うと「うれしい」と一言。

介護タクシーのストレッチャーで家に入ると、二人でまずご本尊の前へ。「3年3ヶ月ぶりの帰還やね〜！」と思わず号泣する。

認知症+歩行器の母とも涙で対面し、完全介護の在宅生活が始まる。当初は食事もし口にし、起きていれば話もやりとりできた。初日から毎日、実家母や兄弟、友人らが見舞いに訪れ、自分の代わりに付き添いや見守りをしてくれ、大変助けられる。

23日(火)、おむつ交換の仕方をも

て指示してくれるが、体重は35Kgしかなく下腹は膨れ上がり痛ましい。夜は傍で寝て時々様子を確認、その緊張感は半端ない。

24日昼、彼女が目を開けて「あなたが忙しいの分かった。色々文句言ってごめん」と辿々しく言われて、その一言で報われた。

午後、彼女が「休めてるか？」と聞いてくれ「心配してくれるんか？」と返すと目を閉じたまま「心配というより、あなたの幸せを願ってます」とゆっくり言われ、思わぬ言葉に胸が詰まり「僕もだよ！」と。

25日朝、前夜にベッド下に置いておいたはずの枕が柵の内側にあってびっくりすると、柵と体のクッション代わりに「ちぐちゃんがんばれ！」と自力で必死に持ち上げたとのこと、切なくて胸が締め付けられる。

そしておむつ交換のあと、いきなり両手で柵を掴んでパッと目を見開き上体を起こして見せ「私、元気だよー！」と。その時だけだったが久々な姿に嬉しくなる。

天気も良く、二人でしばしのんびり飲み物。「せっかく帰ってきたのだから、こういう時間をもっと大事にしよう」とのこと。その日は「歯磨きが一番しんどいけど自分でする」とか、「明日は体起こす練習する」「お灸もしたい」などとも言う。

夕方、同級生のSさんが見舞いに来ると、彼女ら夫婦の病気を知っている妻は「一日一日一生懸命生きるんだよ」と声に出した。

夜、「美味しいもの食べたり、一緒にいるんなところに行けなくてゴメンね」と言うと「それよりもっと大事なことがあるよー」と、目を閉じたまま一言。

しかし翌26日(金)朝、「もう私逝っていいかな、体動かないしとても辛い」と突然の言葉。動転するがもはやダメとも言えず。そして「私、仏さんになってこの家と

暁さんを見守る」と言い、涙で頷くしかない。訪看さん来て鎮痛坐薬を処置。訪問診療の医師も静かに見守ってとのこと。

駆けつけてきた妹さんも「あかんよ！そんなになってもらってくれなあかん！」と激しく号泣。他の親兄弟や友人知人らも代わるがわる見舞いに来られ、それぞれに涙。

傾眠状態もさらに長くなり、発語も弱く小さく、何度も聞き直さないとわからない。夜は実家お母さんが泊まると言ってくれたが、夜中に本人の希望でおむつ交換や介助を自分に所望。「辛いから手を握ってて」と。

しばし腕枕して「あなたは立派だよ、よくがんばった、素晴らしい人生、最高の奥さんだよ」などと語りかけた。

27日（土）昼、周囲の親族に再び「静かに逝かせて」「許してね」と言い、自分には「お浄土へ行くって言って」とのこと、そのように応える。夕方訪看さんが「血圧が昼の80から70に落ちてる、鎮痛坐薬を使いたいけど血圧落ちるリスクもある、このペースでは夜中に60くらいになるかも、ただ60より下がるとすーっと亡くなる場合もある。もう気力だけで生きている」との説明を受け、本人に問うと「楽に眠りたい」との意思表示。夜中か朝方覚悟する。

タオル類で少しでも安楽な体勢を試行しながら、結局その夜は持ち堪えたが、夜中3時半ごろベッド柵に掴まりながら必死に何度も何か訴えるのを、入れ歯外れたような発語のため10分くらい聞き取れず。

困り果てて「ごめんなあ、体をなんとかしてほしいんやろけど、わからんよ～」と

言うと彼女は首を横に振り「もーお、仏さんのそばに行きたい！」と呻くのをやっとで理解する。「そのくらい辛いんやな？」と問うと頷き、もう涙で背中さするだけ..。

28日（日）朝から実家親族らが次々と訪れ部屋周辺は再び実家状態に。昼には血圧50台まで下がり、自分は不在だったが実家母が「後悔はないんか？」と問うと首を大きく横に振ったとのこと（ないという意味）。

夕方には40台まで下がりながらも首などで意思を伝えようとしていて、ベテラン訪看さんも、これほどの気力・意志力は滅多にいない、未知の領域だと。

ひととき部屋に二人だけになる。頭やお

腹に手を当て、小さな息を見つめながらいろんな思いが口をついて出てくる。親族友人らも其々お別れ。

夜、手を握って顔に触れながら、思わず「よくぞ俺と一緒にしてくれたな、この家に来てくれたな、幸せやったか？」と問うと、すぐさま大きく頷いた。もうあたり憚らず大声で「ありがとお～！救われるよお！」と号泣してしまう。

8時半ごろ、気がつく时下顎呼吸に喉のぜいめいが現れ、訪看さんや大勢の親族・友人ら見守る中、9時42分に最後の息が止まり、遂にこの世の命を閉じた。皆、号泣。「ちぐちゃ～ん！」「本当によく頑張ったなあ！」「ありがとなあ！」それしか言えない。

最後の最後まで与えられた命の全てを振り絞るかのような、気力生命力を限界以上まで使い果たすかのような壮絶な生き様、そして看取りとなった。南無阿弥陀仏。



●命終後は、通夜・葬儀へとさらに涙と怒涛の四日間。葬儀翌日は体も心も泥に埋もれたような重さ。後始末も何も、あの看取りがあまりに衝撃的すぎて頭から離れません。



健気な妻の姿ばかり浮かび、あれほど一途に努力積み重ねてきた彼女が、ああいうかたちで命を終えた現実が全く理解できない。最愛の妻がいないのに自分がまだ生きているこの違和感。

6月22日は友人たち企画「偲ぶ会」では17名の方が温かな場を作ってください、翌日の満中陰法要と会食が無事済んで遺影に向かうと、突然「君の忌明けだったんやて！信じられんわー！」と込み上げ大声で号泣。虚脱感と悲しみがぶり返しました。

毎日家事と法務を一人でこなしていると、ふと、妻がいたらいろいろ相談できただろうし、二人で他愛もない話をし、笑い合いいたわりあう、そんな日常が永遠に失われている事実に、愕然と打ちのめされます。

家族や寺の将来はともかく、一緒にのんびり朝食をとったり、どこか美味しいものを食べに行ったりと、それだけが張り合いでした。しかしそれは今正直どこにもありません。

やはり伴侶を亡くされた方が、遺影を前に「名前を呼ぶともう（涙で）ダメ」と仰っていたり、仏壇などに沢山の好物をお供えされたり、故人の遺品何一つ捨てられないとか、恐山など口寄せに赴く人たちの気持ちに今になってわかる気がします。

●毎晩内陣前で一日の報告をし、三ヶ月近く経ちました。日々慌ただしくも大過なく終えられるのも、お浄土から彼女や阿弥陀様の尊い支え・お働きがあるからに他ならないと、お念仏と感謝を口にしながら涙込

み上げてきます。

「そちらで淨らかで軽やかで最高の幸せになってるか？」「いつも傍にいてくれてるよね」と語りかけつつ、でもそれはいやだ！それより何故ここにいないんだ！という

慟哭が涙になってしまう。そういう涙があるのを恥ずかしながら初めて知りました。

葬儀後、いろいろな方から心こもった言葉をいただき、何度も涙しました。無沙汰をしていた友人らの伴侶やお身内にもさまざま出来事があったのを知り、涙分かち合ったり、彼女のご親族ご友人の中には、自分とは別な悲しみを一人抱えておられることにも気付かされたりもしました。

妻がつかないでいるこのようなご縁を、今後も大事にしていきたいと願っています。

家では母の介護に加えまだまだ後始末が続きます。ご縁の皆様には、今後ともお力添えの程どうか宜しくお願い申し上げます。



▼今回このような一部始終を綴ったのは、自分の心を整理するためと妻の生き様を少しでも伝えたいという感傷・自己満足からです（次号にも続きます）。お読み頂き感謝いたします。

▼本人が辿った経過や治療方針、夫である自分の対応については、賛否や疑問などあるかもしれません。もしご不快に思われましたら何卒ご寛容願います。

報恩講：9/22（日）昼3時・夜7時
ご法話：森井善教師（鯖江神中道場）